

## 木内信蔵先生と山口岳志先生をしのぶ

人文地理学教室 田 辺 裕

もう若い世代には田道間守の歌は古すぎて、皇国史観の再来かと思われるかもしれない。しかし1993年4月5日続いて4月7日に、パリ大学都市日本館の館長室のファックスが両先生の訃報を打ち出したとき、なぜかこの国民学校で習った歌が浮かんできた。忌引きの対象となる親族の場合でない限り、派遣法という特別の法律によって公用旅券で派遣された身では、簡単に帰れないことが分かっていたから、余計つらかった。

私自身、木内先生が駒場で育てられた総領と自覚しており、山口先生とは昭和38年に共に助手となって以来、駒場の人文地理学教室でもっとも近い同僚であったから、葬儀に列席するだけでなく、両先生を追悼すべきならかのことを率先してしたいという気持ちが強かった。しかし4カ月遅れて帰国した頃には、谷内、荒井両先生や先輩たちがすべてを取り仕切って、以下のページに見るように、諸先生方の一連の追悼文や紙牌を準備しておいてくださった。帰国後ただちに妻を同道して両家を弔問に訪れたが、教室員がよくやってくれたと逆に謝意を述べられてしまった。それに私が追悼文を書こうとすれば、とても短いページではすまなくなるので、ここでは個人的追憶と追悼をあきらめ、これら諸誌紙に掲載されたものを再録することにした。

なお、山口先生は、平成6年3月に定年を迎える予定であったので、その記念号に掲載予定だった先生の略歴と業績目録を加えた。これは先生ご自身が生前に作成されていたものである。先生はなくなられる1年前に、退官に際してのスタッフへの手紙の草稿も書かれていた。私は大学に復帰後、その遺書ともいべきお手紙を頂戴した。最後の「ありがとう」の文字が、涙でよく読めなかった。

一周忌に際して、木内先生のご家族の内輪の会にお招きいただいた。留学に際して一家をあげて羽田までお送りいただいたこと、日本館に着任直後にお嬢さんとお孫さんがパリまでやってきましたことなど含めて、暖かく息子のようによんでくださった先生のご家庭の雰囲気を感じ出した。木内先生との出会いは1955年にさかのぼる。学父と呼ぶ言葉があるとすれば、先生はまさに私の学父であった。

また一周忌を期して、有志で山口先生のお墓参りをした。帰路、突然だれかが声を上げた。偶然、近くに東京大学地理学教室の創設者、山崎直方先生のお墓を見つけたのだった。そこで、山崎先生の奥様が私の大学院時代までご存命だったこともわかった。ねがわくば木内先生、山口先生の奥様方も、どうぞ健康で長命であられますように。

## 《訃報》木内信蔵名誉教授

本学名誉教授木内信蔵先生は、4月7日肺炎による急性呼吸不全のため逝去されました。享年82歳でした。

先生は昭和10年東京帝国大学理学部地理学科を御卒業後、大学院、理学部助手、講師を経て、同24年に教養学部助教授になられ、同25年に理学博士の学位を授与され、同31年に教授に昇任され、同46年に停年のため退官されました。

33年に及ぶ本学在職中は、教養学部、理学部、文学部、理学系研究科において地理学の研究及び教育に携わり、多くの後進を育成されるとともに、数々の学内委員会の委員長及び委員を勤められ、大学運営に尽力されました。

先生の御専門は都市地理学で、わが国における都市地理学の確立とその発展に貢献されました。御研究の成果は『地域概論』及び『都市地理学原理』をはじめ、多数の著書、論文、編著等として発表されております。

また先生はわが国の代表的な地理学者として、日本地理学会会長、日本都市学会会長、国際地理学連合副会長など内外の諸学会で数々の要職を歴任されて学際的、国際的に活躍されるとともに、厚生省人口問題審議会委員、国土庁国土審議会委員をはじめとする多くの要職を勤められ、長年の御功績により昭和57年には勲三等旭日中綬章に叙せられました。

ここに先生の御生前の温かいお人柄を偲びつつ、先生の御冥福を心からお祈りいたします。

(谷内 達)

(学内広報 No.952 1993年4月26日付より転載)

## 木内信蔵先生の訃報に接して

木内信蔵先生は、1993年4月7日、82歳でこの世を去られた。この類稀な地理学者は、国内はもとより国際的に広く知られており、世界の多くの人が先生の死を悼んだ。

先生は1910（明治43）年11月19日、東京市日本橋区富澤町の商家に生を受けられた。関東大震災で家を失い、本郷の駒込曙町へ転居された。府立三中をへて浦和高等学校理科甲類へ進まれ、1932年に東京帝国大学理学部地理学科へ入学、辻村太郎先生の下で地理学を広く学ばれた。35年の卒業後、すぐ大学院へ進まれ、学者としての道を着実に歩まれた。38年に副手になられ、すぐ東京地学協会に入会された。42年には助手になられたが、副手・助手の間、何度も中華民国・満州・朝鮮半島に調査に行かれ、東アジアの都市地理学的研究をグローバルな視点と異文化理解の観点から進められた。

1945年に駒込で被災されたが、公私ともに多忙な時代であったにもかかわらず、研究活動を続けられ、46年に専任講師に昇格された。各種の学協会へ積極的に参加され、東京地学協会では地学雑誌の編集委員を勤められた。50年に「都市の地理学的研究」により東大より理学博士の称号を授与された。この論文に補筆を加えたものが「都市地理学研究」（古今書院、1951）で、当時の日本における都市地理学研究上のバイブル的存在となった。本書の学問上の貢献に対し、59年にベルリン地理学会よりカール・リッター賞が授与されている。

先生の御研究は都市地理学のみならず、幅広く地理学全般にわたり、さらに地球科学、地域研究、環境科学などを網羅する広いものとなった。多くの学協会の役員を勤められたが、中でも日本地理学会・日本都市学会会長、国際地理学連合副会長、太平洋学術協会地理学委員会委員長は特筆に値する。本協会でも理事・監事などの要職を勤められた。アメリカ地理学会からはデーヴィドソン金賞を贈られている。王立スコットランド地理学会・オーストリア地理学会の名誉会員でもある。

先生とは異なる大学をでた私にとっても、先生は都市地理学上の真の恩師であった。1957年の国際地理学連合日本地域会議の際に東京ガイドブック編集や巡検のお手伝いをしたことに始まり、60年にアメリカから帰国した私をすぐ東京市政調査会の先生が主査をされていた委員会へ入れていただいたり、その後、地域開発センターでの仕事も一緒にさせていただいた。68年には第21回国際地理学会議出席のためインドのデリーとベナレスに行き、そこで新設された先生が委員長都市化研究委員会 IGU Commission on the Processes and Patterns of Urbanization の幹事をやらせていただくこととなった。イギリスの Smailes 教授やドイツの Schöller 教授と楽しく有意義にすごしたロンドンでの集会在忘れられない。ユーラシア大陸南回りの長い空旅の後のことでもあり、時折うとうととされることもあった先生であったが、集まった人すべてが、先生のそのお姿を温かい眼差しで見っていたことも懐かしく思い出される。

その翌年の春、先生は東大を定年退官され、成城大学へ移られた。

語学に強く、旅行が大好きで、スケッチに親しまれた先生。そのお人柄は正に万人の愛するものであった。ここに深く御冥福をお祈りする次第である。

1993年 8月 立正大学教授 正井泰夫

(地学雑誌 第102巻 第5号 1993年10月25日発行より転載)

## 木内信蔵先生の逝去を悼む

日本地理学会名誉会員木内信蔵先生は、1935年4月に入会、1938年に書記を委嘱されて以来、実にさまざまな役職、常任委員長（1964～1966）、会長（1968～1970）を歴任し、本学会の発展に大きく貢献されたが、1993年4月7日、満月の桜雲に包まれて不帰の旅路につかれた。享年82歳、今なお心底からこみ上げてくる悲しみを禁じえない。

木内先生は1910年11月19日、東京市日本橋区富沢町に生まれ、近代化の中心街で育ち、府立第三中学1年生の秋、関東大震災で焼け出されて、本郷区の駒込曙町に転居された。浦和高等学校理科甲類在学中、地質鉱物の野外実習で秩父地方に旅行、地層の不整合、断層、段丘、美しい片岩類等について学び、興味がわいたことも地理学に志すひとつの契機になった。叔父上で著名な物理学者木内政蔵先生には、地震学の専攻を奨められた由であるが、先生は都市の震災復興の方により深い関心を抱いて、1932年東京大学理学部地理学科に入学、辻村太郎先生の指導を受け、生涯を通じて深く敬愛し、恩師もまたこの門弟の意見を最も信頼されていた。大学院、副手、助手を経て、1946年11月、東京帝国大学理学部専任講師となる。筆者は幸い初講義の「応用地理」を拝聴することができた。

1949年5月、東京大学助教授に昇任、新設の教養学部人文地理学教室の創設にあたり、筆者が助教授として1958年4月に迎えられるまでは、たったお一人で、併任教授の田中 薫先生をはじめ、先輩各位と教え子の一人園池大樹氏らの非常勤講師に支えられて教室の基礎固めと、シニアコース教養学科の人文地理学分科設立に尽力された。同時に理学部地理学課程も併任で助け、1953年からは大学院研究科地理学課程も担当。1956年6月には東京大学教授（教養学部）に昇任、1964年には同学部に開設された「現代分化第五講座（人文地理学）」担任となつて、時には研究科主任、人文科学科科長などの要職も務めて、1971年3月定年退官、同年5月には名誉教授の称号を受けられた。その間、1961年より約1カ年間はシカゴ大学の客員研究教授として招かれ、Ch. D. ハリス、N. ギンスバーク教授たちと親交を深めた。1972年4月から1981年3月までは成城大学経済学部教授となり、その間、2期4年間は経済研究科科長の重責を果たされた。

木内先生の研究領域はきわめて多方面にわたり、東京大学退官当時までに印刷された著書、論説、報告などは350点をこえた。（木内教授退官記念会編『木内信蔵先生の履歴と業績』1971年）。すでに学部学生2年次において、初論文「熔岩流形」（地理学評論第9巻第8号、1933）などを、大学院1年次には「火山のヒプソグラフ曲線」（地理学評論第11巻第8号、1935）などを発表、これらは生涯にわたる旺盛な研究著作活動の前触れとなった。

理学部学生として自然地理学的素養を積まれた後は、本番の都市研究に主力を注ぎ、1936年には「PHYSIOGNOMIE 通り——東京市に於ける都市景観地理第1報及第2報——」（地理学

評論第12巻第2号)を發表,以来,毎年のように意欲的な論文によって頭角を現わした。1939, 40, 42年には3度, 中華民國・満州国・朝鮮半島における地域調査を行ない, 国際的比較研究の道を開く。1937年には都市学会の会員, 後に幹事となり, 高山英華先生がたとその発展の基礎作りに励み, 東京市四谷谷町小住宅密集地区の学際的調査を実施, それに参加した学生の田辺健一氏は, 木内門下生きっての都市地理学者となった。

1945年4月13日には空襲にて被災, 戦中戦後の劣悪な環境において学位論文『都市の地理学的研究』の作成に奮闘し, 1950年4月には理学博士の学位を授与された。その翌年には不朽の名著『都市地理学研究』が古今書院から発刊された。本書は, 都市地理学の体系を創り, とくに大都市地域の構造的な研究を開拓した画期的大著である。アメリカ, ドイツ, オーストリアなどの著名な地理学者によって専門雑誌に詳しく紹介され, 多大の反響を呼んだ。なお, 本書は1979年に改訂増補され, 『都市地理学原理』として出版された。この間には, 日本地理学会都市化研究委員会委員長として, 『日本の都市化』(古今書院, 1964)を, また国際地理学連合(IGU)の都市化研究委員会委員長としては, 『世界の都市化に関する論文集』(1975, ロンドン)を刊行するなど, 内外における都市地理研究に指導力を発揮された。

先生の研究業績で双璧をなす一方の宝玉は, 地理学観をまとめた高著『地域概論——その理論と応用——』(東京大学出版会, 1968)である。その基礎となった『人文地理学』(至文堂, 1951)は, 『都市地理学研究』と同年に出版されたことも驚きである。これを全面的に拡充し, 「地域の本質について体系的に論ずるとともに, 地理学以外の分野の人々にも, 地域問題を正しく分析するための基本となるように努め」(同著序文)で, 第Ⅳ章には「地域計画・地域開発および地域経営——地域論の応用」を加えて掉尾を飾られた。級友の能登志雄氏は, その書評(東北地理, 第20巻第3号, 1968)において, 「日本の地理学における本書の意義を, アメリカにおけるハーツホーンの*The Nature of Geography*のそれに比べたい」と述べている。ただし至言である。なお, 本書は先生が国土審議会委員(1975~1981)に推挙された際, その重要な根拠となった由である(今野修平氏談)。

先生の研究上, もうひとつ力を注がれたのは, 人口地図, 経済地図などのレベルアップである。1956年にIGUが設置した「世界人口地図特別委員会」のメンバーとしても活躍, その関連論文は, 「人口分布図の意義と統計および作図上の諸問題」(地理学評論第34巻第10号, 1961)と「経済地図の本質と利用に関する一考察」(成城大学経済研究第76号, 1982)などとして発表されている。それに劣らず先生は, 土地利用研究に関しても優れた論文を遺され, 1967年から2カ年は, 自治省土地利用計画研究委員会委員長も務められた。

木内先生はIGUの副会長をはじめ, 日本都市学会会長, 東京地学協会副会長なども歴任, 1980年には第24回国際地理学会議を, 山本莊毅, 矢沢大二氏らと協力して成功させ, 日本の地理学水準を世界に紹介された。こうした学術上, 内外の学協会活動における顕著な功績に対して

は、まず1959年にはベルリン地理学協会よりカール・リッター銀賞、1975年にはアメリカ地理学協会よりジョージ・デーヴィドソン金賞、1980年にはIGUからローレル賞、1992年には東京地学協会賞が贈られた。また、王立スコットランド地理学会、オーストリア地理学会、IGU、東京地学協会の各名誉会員、英国王立地理学協会の通信会員の榮譽も受けられた。

木内先生のお人柄は、お名前どおり万人の信頼を一身に集め、文字どおり粉骨砕身、地理学の飛躍的發展、門弟の育成、社会的貢献、国際親善に日夜尽力された。先生は外柔内剛の人であり、不言実行、名より実を取る方をよしとされた。分刻みの超多忙の中にあっても、まめに音信をつづけ、御家族との団らん、客人のもてなしにも心を砕かれた。好著『自然との語り』(古今書院、1976)は、師、友人、子弟たちとの心温まる交歓録でもある。ようやく、この世の重荷から解放された木内先生は、画帖を手にしてコスモスの花園を散策しながら、地球との対話を楽しまれているにちがいない。天国からの美しいスケッチ便りを心待ちにしながら、先生の御浄福を心からお祈り申し上げる次第である。

1993年師走 西川 治

(地理学評論 第67巻 第2号 1994年2月1日発行より転載)

## In Memoriam Professor Shinzo Kiuchi

by Masatoshi Yoshino

Chairman of the National Committee

for IGU in Japan, and

Vice-President of IGU

Professor Shinzo Kiuchi, former Vice-President for the terms 1972-1976 and 1976-1980, died in Tokyo on April 7, 1993, with deep sorrow of geographers all over the world. He was born in Tokyo November 19, 1910, and educated in Tokyo. He graduated from the Tokyo University (BSc) with a major of geography in 1935 and entered the graduated course in the same year to study further geography under the leadership of Professor Taro Tsujimura, one of the most eminent geographers in Japan. In 1938, he got a position of assistant and in 1942, instructor at Geography Department of the same University. During these days, he joined many times to the field study groups in China and Korea and carried on enthusiastically researches on urban geography in East Asia from the global point of view.

In 1945, he was burnt out by bombing fire at Komagome in Tokyo. Under the difficult situation just after the defeat of the War II, he continued his academic activity. He was nominated to a lecturer in 1948. He received Doctor of Science Degree at the Tokyo University by presenting "Geographical Studies on Cities" in 1950. This work, published as a book in Japanese, was a "bible" for Japanese geographers at that period and he received the Carl Ritter Silver Prize from the Geographical Society of Berlin in 1959 for his valuable contribution by this book.

His interest was directed not only to urban geography, but also to a wide range of geography and further to earth science, regional studies, environmental sciences etc. He was a president of the Association of Japanese Geographers, president of the Japan Association of Urban Studies (Nippon Toshi Gakkai), chairman of the Geography Committee of the Pacific Science Foundation and worked actively in many other learned societies. The American Geographical Society presented him the Davidson Gold Medal and the Royal Geographical Society of Scotland and the Austrian Geographical Society nominated him to an honorable member respectively.

Under his influence, Japanese urban geography has developed: The "Committee of Urbanization" and later "The Committee of Urban Geography", established within the



Association of Japanese Geographers, began activity in 1958. He was also involved in the committees in Tokyo Municipal Research Institute (Tokyo Shisei Chosakai), Japan Centre for Area Development (Nippan Chiiki Kaihatsu Centre), Chubu Centre for Area Development Research and Tokyo Metropolitan Government. This means that his activity was not limited to the inside of geographical organizations, but expanded to the urban/municipal policy and planning fields.

In 1968, he was nominated to a chairman of IGU Commission on the Processes and Patterns of Urbanization. As internationally known, the fruitful results of this Commission contributed to level up urban geography to the higher standard of the present day. In 1980, the General Assmby of IGU approved the proposal of the Executive Committee that the title of a Lauréat d'Honneur was given to Professor Kiuchi.

(Bulletin of the International Geographical Union 44, 1994 より転載)

## 《訃報》山口岳志名誉教授

教養学部教授山口岳志先生は、4月5日敗血症のため逝去されました。享年59歳でした。

先生は昭和33年に東京大学理学部地学科を卒業され、トロント大学・ペンシルバニア州立大学の両大学院で学ばれた後、駒沢大学、北海道大学を経て、昭和50年に本学教養学部助教授となられ、昭和58年に教授に昇任されました。

本学では教養学部の一般教育課程及び教養学科において人文地理学及びアメリカの地理を担当されるとともに、理学系研究科地理学専攻において大学院教育を担当されました。また教養学部人文地理学教室主任及び理学系研究科地理学専攻主任として教室及び専攻の運営にあたられるとともに、教養学部人文科学科長をはじめとする委員会委員長及び委員を勤められ、大学運営に尽力されました。

先生の御専門は都市地理学及び北アメリカ地誌を中心とする人文地理学で、「都市の機能に関する地理学的研究」により、昭和45年に東京大学から理学博士の学位を授与されました。またカナダ及びアメリカ合衆国での研究・教育の御経験に裏付けられた豊かな国際感覚を生かして内外の諸学会で学際的に活躍され、わが国の地理学会をリードしてこられました。

1年後の御停年を前にして、いよいよこれから御研究の集大成にとりかかろうとするときに不帰の人となられたことは、まことに痛恨の念に堪えません。先生の御冥福を心からお祈りいたします。(谷内 達)

(学内広報 No.952 1993年4月26日付より転載)

## 山口先生の御逝去を悼む

山口岳志教授は脳梗塞による敗血症のため4月5日に逝去されました。享年59歳、御停年の1年前でした。

御葬儀は4月7日に萩窪の御自宅に近い中道寺において営まれました。前夜の御通夜には十四夜の月が皎々と照らし、当日の御葬儀では満開の桜の花びらがはらはらと参列の方々の頭上に散って、まさに西行の『願わくは花のしたにて春死なむ そのきさらぎの望月のころ』を思い起こさせるお別れでした。

山口先生は、昭和33年に東京大学理学部地学科を卒業され、トロント大学・ペンシルバニア州立大学の両大学院で学ばれた後、駒沢大学、北海道大学を経て、昭和50年に教養学部助教授となられ、昭和58年に教授に昇任されました。しかし山口先生と教養学部との御関係は、先生がアメリカ研究センター研究員になられた昭和38年に遡ります。翌39年からは教養学科の非常勤講師として「アメリカの地理」などを担当されました。

私が山口先生と初めてお会いしたのは、私が教養学科人文地理学分科の内定生となった昭和39年の冬学期でした。このとき受講した「アメリカの地理」は、先生にとっては教養学部で最初に担当された科目であり、奇しくも私はその第1期生の光栄に浴したことになります。先生の講義の厳しさは今日に至るまで定評のあるところですが、すでに最初の講義にも十分に発揮されていました。

当時山口先生は、非常勤講師とはいえ、事実上人文地理学教室のスタッフのような感じで私達学生の指導にあたっておられました。野外実習の折に金沢の宿で、深夜じっくりと酒を酌み交わしながら、私の大学院への進学希望について話相手になっていただいたこともあります。そのときに「学問に一番大切なのは根気ですよ」と暖かい励ましの御言葉をいただいたことを、まるで昨日のことにように思い出します。

昭和50年に教養学部に着任されてからは、一般教育及び教養学科において、人文地理学関係の諸科目を担当されるとともに、理学系研究科地理学専攻において大学院教育を担当されました。また人文地理学教室主任として教室の運営にあたられるとともに、人文科学科長や第八委員長をはじめとする多くの役職を勤められました。

山口先生は、このような教育及び教室・学部の運営にあたって、円滑な人間関係を保つ気配り、完璧な成果を目指す厳しさ、そしてあらゆる不測の事態を想定してあらかじめ対策を講ずる慎重さをつねに発揮されて、多くの後進を育て、教室・学部の円滑な運営に尽力されました。このような、気配り・厳しさ・慎重さを兼ね備えるということは、我々凡人の及ぶところではありませんが、これからも「このようなときには山口先生ならどうされただろうか」と思い出ししながら、少しでも学んでいきたいと思えます。

先生の御専門は都市地理学及び北米地域研究で、「都市の機能に関する地理学的研究」により、昭和45年に東京大学から理学博士の学位を授与されました。またカナダ及びアメリカ合衆国での研究・教育の御経験に裏付けられた豊かな国際感覚を生かして、国際地理学連合の都市システム研究委員会委員やオランダの学術誌の編集委員などを勤められるなど、国際的に活躍されました。

先生は、御自身の著書は後回しにして他の人々の研究業績づくりに奔走される方で、いわば無欲・謙遜の人でした。御自身には余りにも厳しさを課してしまわれたのではないかとさえ思われます。先生は自他ともに認める愛煙家でしたが、それが唯一のストレス解消だったのでしょう。

もう何年も前ですが、先生に大変お世話になった私の論文に先生への謝辞を記したところ、余計なことを書くなど、きついお叱りを受けました。また最近御停年がせまってきたても、いかなる停年企画も一切まかりならぬとの厳しい態度を堅持しておられました。おそらくこの文についても、余計なことをするなどお叱りを受けることでしょう。

謹んで先生の御逝去を悼み、御冥福をお祈りいたします。(谷内 達)

(教養学部報 第377号 1993年7月7日付より転載)

## 紙 碑

評議員山口岳志君は、昨年7月に発病、療養の甲斐無く今年4月5日不帰の客となられた。享年59歳。その数日後、恩師であり、同じ東京大学人文地理学教室初代教授であった木内信蔵名誉会員も世を去られたが、戦後の日本の人文地理学、とくに都市地理学の発展に貢献されたお二人を失ったことは、斯界にとって大きな損失と言わざるをえない。

山口君は1958年東京大学地理学科卒業後、第1回カナダ政府留学生としてトロント大学大学院に入学、その後アメリカペンシルバニア州立大学博士課程を経て3年余の勉学ののち帰国、母校の助手となった。その後、駒澤大学、カナダ・ヴィクトリア大学、北海道大学を歴任の後、1975年東京大学教養学部助教授に迎えられ、1983年教授に昇任、今年春に至った。

留学した1950年代のカナダの産業動向から、当初鉱業地理学に関心が深くこの分野でいくつかの仕事をもとめているが、その後地域論を中心とする方法論に関してもすぐれた研究成果を発表している。留学時代はまた、アメリカ・カナダ地理学界に計量化の波が及びはじめた時期に当たるが、Moser, Scottの“British Towns”に触発されて、1960年代半ばに当時のわが国では先駆的な主成分分析法による日本都市の機能分類を手がけて以来、都市地理研究に携わるようになった。1976年にIGU都市地理研究委員会の仕事を木内教授から引き継いで以来、その卓抜な語学力を駆使して活躍の場は国外が中心になった。海外における調査・研究や国際会議での活躍などを介して各国地理学者との交流の輪を広げ、また、若手研究者の相互交流の推進といった仕事にも熱心に取り組み、駒場の人文地理学教室には何時も世界の地理学研究者の姿がみられた。学内にあっては教室主任として人文地理学教室の運営につとめるとともに、人文科学科長、厚生委員長など多くの委員会委員の任につき、学外においても日本学術会議地理および人文地理の両研究連絡委員、日本地理学会評議員・常任委員や文部省の各種審議会委員などを歴任した。

平均年齢が70歳を超える今日、59歳の死は余りにも早すぎると言わざるをえない。37年間同じ道を歩んできた友人として日常接触の機会も多かったのに、縦横の活躍がさしもの頑健な身体にも過重な負担となったのを見逃したことは、痛恨の極みである。蓄積された経験を学会に生かすことが期待されていた折りの死は惜しみても余りある。心からご冥福を祈る。(井内昇)

(地理学評論 第66巻 第10号 1993年10月1日発行より転載)